



グッド・ウィル・ツリー(善意の木)

昭和46年(1971)5月14日付消印で、青木元町長あてに郵送された文書が、総務課から資料館へ回付されてきました。

書状を見て「エッ!」と驚きました。役場前に毎年春に咲く「花水木」が特別の意味をもったものであることが判ったのです。

差出人は、福岡市今泉1丁目・深海満治さんで、調べてみたら有田町中樽の出身で、明治32年2月8日生まれ、ご健在であれば100歳です。書状から判断すると、現在の東京工大をでて、商工省、大蔵省にお勤めだったようです。

ことのいきさつは次の通りです。

深海さんが福岡市にご在任の頃、親交のあった米軍キャンプ・ペニントン大佐が、昭和23~26年の勤務をおえ、帰国の際に梅の苗木を「梅の花は、日本の心です」と説明して進呈し、それがフロリダで大きく育ち、現地の人には珍しい花と賞でたそうです。

ところが、陸軍士官学校の教官となったペニントン大佐は、同校の校庭に咲くGood Will Treeの苗木を、この木も梅と同じ「誠」の意味をもつと説明をつけ、軍用機でアメリカから深海さんあてに送られてきたのです。

深海さんは、九大農学部で苗木を預け、育ててもらい、3m以上に成長したので、尾崎行雄記念館からお裾分け頂いた同種の木とあわせ、オリンピックに因み5本の木を東中州の水上公園に、安川第五郎氏をはじめ、板付基地司令官ブラック大佐など多数の方が出席



平成元年陶器市のころの花水木

して植樹されました。

この、グッド・ウィル・ツリーは「花水木」の事です。この花は、キリスト教に関係があるそうでGood Will Flowerは信善花とも言い、十字架のように四弁が縦長く、横が短くなっています。

前置きが長くなりましたが、深海さんがこの「善意の木」を、出身地の有田へ進呈されたのが、役場前の「花水木」のようです。

深海さんから青木元町長あての書状に、次のように書いてあります。

「貴役場のグッド・ウィル・ツリーに花が咲きましたか。白い花ですか、赤い花ですか。先日、貴役場の木を拝見して安心しました。花が咲いたか、知りたいものです。何卒よろしくグッド・ウィル・ツリーをお守り下さいませ」とあります。

深海さんは「何事も信の心で」(Everything with good will)と言葉を添えておられます。

深海満治さんをご存知の方はいらっしやいませんか。

(久富)

季刊

皿山春

No.45

有田町歴史民俗資料館・館報

幻の画家

片岡源次郎

片岡源次郎とは

それは平成11年2月23日、突然の訪問から始まりました。訪問者は地元のテレビ局STSの記者、内田信子さんでした。「明治期にアメリカで活躍した日本人画家で、エトウ・ゲンジロウ（あるいはカタオカ・ゲンジロウ）という人が有田の人だったらしいが、何かその人についての資料はないか」という質問でした。

内田さんにアメリカ在住の上住升さんという人からもたらされた情報は次のようなものでした。

「彼、エトウ・ゲンジロウは1867（慶応3年）、佐賀県松浦郡有田に生まれ、1924（大正13年）東京で死亡。彼は1891（明治24年）から1911年にかけてアメリカに在住。画家としてアメリカ東海岸コネティカット州グリニッチ町に滞在した。彼は当時ニューヨークの舞台上で演じられていた〔マダムバタフライ〕のステージデザイナーであったと資料にある。グリニッチに滞在中、アメリカ印象派の画家ジョン・トウオクトマン、エルマー・マックレーなどといった人々と交流を深め、彼らの作風に大きな影響を与えたといわれている。トマス・イーキンズというアメリカの著名な画家が1906年に、エトウ・ゲンジロウ氏の肖像画を描いた記録があるが、その絵はアメリカにはない。多分、ゲンジロウ氏が日本に持ちかえたのではないかと考えられている。」

この話を聞いてまず思ったのは、有田にはエゾエという姓はあるがエトウというのはあまり耳にしたことはないけれどということでした。更に有田・皿山史のバイブル『肥前陶磁史考』は勿論、『有田町史』にもその名前を捜し出す

ことはできません。でも「片岡」という姓は馴染みのあるものでしたし、有田出身の人でアメリカでは著名な画家だったのであれば、なぜ地元で記録がないのだろうか、また、海外へ渡航することが命懸けのころ、どのよ



アメリカ滞在中の片岡源次郎
(田中祐喜子さん所有)

うな動機でアメリカへ渡ったのだろうか興味を湧いてきましたので、「しばらく時間を



着物を身につけたアメリカ人女性たちと源次郎
(ブッシュ・ホーリ・ハウス所蔵)

下さい」という返事をしたその日から、内田さんと当館による幻の画家・片岡源次郎探しの日々が始まったのです。

片岡源次郎の足跡を求めて

幕末から明治にかけて「片岡源次郎」という人が有田に存在したのかを調べて、確かにその人物を発見したのです。この時点で源次郎が江副家に養子に出たことがわかり、そのためにアメリカでエトウという名が残ったものと推測されました。当然のことながら、片岡源次郎その人は大正13年に亡くなっていましたが、遺族の方がいらっしゃるのではと望みをつなぎました。しかし、残念ながら三女の小山文さん（白川）は平成4年に死去されており、長男榮一郎さんは幼少のころ養子に出され所在がわかりません。

その後、文さんの長女田中祐喜子さんが白川在住ということがわかり、早速連絡をとり訪ねました。

母の遺品という油絵や水彩画などと一緒に、祖父が写っているという一枚の写真を見せていただきました。アメリカで写されたものと思われる源次郎その人は口髭を生やし、右手をズボンのポケットに入れダンディーな姿でした。

「母は幼くして両親を亡くし、小山家の養女になり実家の片岡家についてはあまり話したことはなかったので、祖父がそんな人だったとは知らなかった」と孫にあたる田中さんも、源次郎についてはよく知らないということでした。源次郎は片岡家の次男でしたので、兄である長男勇一さんの子孫を探しましたが、有田では見つけることができません。また源次郎の妻エンさんは白川の商人川内愛作の次女でしたので、川内家から辿ろうと思い、その子孫の方が佐世保市に在住だということがわかり問い合わせたところ、「お婆さんは病気で早くに亡くなったことは聞いているが、おじさ

んが画家だったということはよくは知らない」ということでした。

さらに有田の歴史や美術に詳しい方々に「片岡源次郎」について問い合わせましたがわかりません。そのような状況の中、伊万里市民図書館司書のレファレンス係犬塚まゆみさんに問い合わせたところ、とても貴重な情報をもたらされました。それは平成7年に東京都庭園美術館で開かれた『アメリカに生きた日系人画家たち～希望と苦悩の半世紀』という展覧会に片岡源次郎の絵が出品されたというのです。ただし、この時点での片岡源次郎は「東京出身」で生・没年不詳の画家とされていました。庭園美術館に問い合わせたところ、その絵はアメリカ在住の人が所有していること、片岡源次郎については図録に記載されていることしか情報はないということでした。しかし、その後STSの内田さんも事件多発で多忙をきわめ、このころから当館でも今年度の企画展の準備に入り、調査は一時ストップした状態に。ところが、思わぬ所で再び片岡の名が出てきたのです。それは幕末から明治にかけて活躍した有田の人びとを追って、岩谷川内の窯焼き松尾徳助の子孫と話をしていた時でした。徳助の三男國治の妻が片岡家の出身ということがわかったのです。ふたたび片岡源次郎について調査を再開。が、えてして調査には不運が続きまとうもので、片岡家の子孫が唐津市に住んでいることがわかったのですが2、3日前に亡くなったばかりとのこと。すっかり気落ちしていたところにその方の姉にあたる方が佐賀市に健在で、何かわかるかもしれないということで、しばらく時間を置いてから連絡しましょうと内田さんと相談しました。



妻エンさんと三女文さんを描いた源次郎の絵 (田中祐喜子さん所有)

佐賀市に在住の岡崎さん(男一孫)からもたらされた情報は、片岡家は赤絵屋であったこと、時々アメリカのおじさんから贈り物が届いていたことなどで、確かに源次郎がアメリカに渡っていたことがわかってきました。片岡家があったのは白川で、現在の華山の敷地内だった

ようです。また、片岡勇一については『有田町史陶業編II』の中に「磁器錦付創業明治18年3月 職工男子6人、女子10人」で、明治30年の第2回品評会で4等を受賞し、大正4年には有田錦付業信用購買組合の理事として活躍していたことが記されています。



長女米さんを描いた源次郎の絵 (田中祐喜子さん所有)

一方内田さんは東京での調査を進め、ついに源次郎の長男榮一郎さんを捜し出すことに成功。高齢ながら父源次郎について次のように語っています。

- ①帰国後は東京にある通信博物館に勤務していた
- ②詩人野口米次郎(彫刻家イサム・ノグチの父)と交流があった
- ③大塚という有田出身の人がよく遊びにきていて、その人は英語が堪能だった など。

この大塚というのは明治2年、当時の皿山郡令百武作十に選抜されて東京の陶画師服部杏圃に師事した4人のうちの一人、大塚民助のことです。彼はのち松尾儀助が始めた起立工商会社に入社し渡米しています。また、大塚民助は片岡家とは姻戚関係にありました。それは民助の妻イエと、源次郎の兄勇一の妻タミは共に白川の窯焼き山本柳吉の娘ということから、このあたりで源次郎とアメリカが結びついてきたのです。これまで何故源次郎はアメリカに渡ったのかが謎でしたが、おそらくこの大塚民助が先に渡米し何らかの情報を源次郎に与えていたものと推測されます。

現在川越市に民助の孫にあたる大塚幹雄さん(92歳)が健在で、お話を伺ったところ源次郎に実際会ったこともあるということでした。ある時期両家は東京でも近所で頻繁に行き来をしていて、小石川の動植物園内で写生している源次郎の姿を覚えているということでした。ただ残念なことに源次郎の筆になる絵もあつたが痛みがひどく処分してしまったということでした。

アメリカでの源次郎

さらにアメリカ・フィラデルフィア美術館からの情報では、「ゲンジロウ・エトーはアメリカ印象派画家

のジョン・トウォークトマン（1853-1902）に師事し、ニューヨークにあったアートスチューデントリーグ（美術専攻学生同盟）で学んでいる。また、1907年（多分前年の1906年にも）水彩画の主要展示会をいくつかの美術館で開催している」ことがわかりました。

フィラデルフィア美術館学芸員のスーザン・ラーキンさんはその論文の中で源次郎の画才について次のようにいっています。

「彼は生活の為に絵を描き、その後自分の描きたいもの、自分の為になる絵を描くようになった。彼の絵は抽象的で常にフレッシュでオリジナル的であったがその絵からは彼のそれぞれの教師の教えが垣間見えた。先生から色使いと基礎を習った後、自分の世界を確立させたが、先生と同じような絵を描くようになることを恐れた。」

また、アメリカの研究者たちにアメリカが生んだ最も偉大な芸術家の名を挙げるとしたら必ず出てくるのがウィンスロー・ホーマーとトーマス・イーキンズでこのイーキンズが源次郎の肖像画を描いていることが、この調査のきっかけになったのは前述のとおりです。イーキンズは若いころジェファーソン医学校で解剖学を学んでいますが、彼の作品には観察と理論が重視されています。しかもただ写すだけではなく、自然を鋭く観察しその持ち物を盗みとるのだという信念を抱いていたといわれます。その彼が好んで描いたものに肖像画がありました。それも彼の友人たちや家族、特に本物のたしなみや教養を持ち何かを成し遂げた人物を忠実に描いたといわれています。その一つが源次郎の肖像画だったというのです。しかしおそらく彼が帰国時に持ちかえったと思われるその絵は現在のところ発見されていません。

前述した白川の田中祐喜子さんが所有されている源次郎の娘や妻を描いた絵と和紙に描いた草花の絵だけが、現在目にすることができる源次郎の絵です。帰国後は生活のために逡信博物館で働き、画家としての道を断念したと思われる源次郎でしたが、独力で会話を学び、美術学校で腕を磨いていったアメリカでの生活はまさに明治期のアメリカン・ドリームの実現だったのでしょう。今後はさらに帰国後の確かな足取りの調査を継続したいと思います。ひとまず一年間の調査についての報告を終えます。

（尾崎葉子）

STSサガテレビで特別番組「ゲンジロウへの旅」が放送されます。

〔放送日〕3月19日(日)

〔時間〕午後3時～3時55分

● 続 報 ● 皿山の 模型作り

昨年7月から作業を進めている、江戸時代の皿山を復元しようという模型作りも毎週熱心な作業を続けているボランティアの方々のお力で、いよいよ佳境に入りました。周囲の山を形作る作業はほぼ終わり、さらに山らしきを出すために軽い紙粘土を使って斜面をなだらかにしています。

これからの作業は「有田千軒」という言葉があるように、1,000軒ほどの町家を作って『安政6年松浦郡有田郷図』の時代の有田を再現していきます。古地図には瓦葺きと藁葺きは色を変えて表現しており、道筋や川筋を入れながら町を形作って行く予定です。全体を3パーツに分けて持ち運びができるので、完成後は皆様に見ていただく機会を作りたいと思っています。



昔の町のことを語りながら作業が進みます



有田ミュージアムズ 連絡会(仮称)発足について

現在、有田地区に14のミュージアムズ(美術館等)があります。これまで館相互の接触がほとんどありませんでした。

そこで、新しい千年紀を迎え、お互いの館の紹介をかねて、この連絡会に参加いただいた館のリレー訪問を町民の皆さんとしよう。また、ざっくばらんな館長会議や学芸員の情報交換会をしよう。との考えから3月1日に発会式を行うことにしました。

連絡会の会長には県立九州陶磁文化館の館長をお願いし、事務局を有田町歴史民俗資料館で受け持つことにしました。

有田町新総合計画では①にぎわいのまち ②活力あるまち ③安心のまちと「まちづくりビジョン」があります。この連絡会もその趣旨にそうものと考えています。この秋には町民の皆さんと共にミュージアム巡りをいたしましょう。詳しくは広報でお知らせします。ご期待ください。

(久富)

季刊『皿山』

通巻45号(平成12年3月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185